

ミルトン・フリードマンと

改革開放以降の中国

—社会主義における市場経済—

要旨

氏名：ショウラクコウ

新自由主義の代表者と呼ばれるミルトン・フリードマンは、マネタリズムの主張者でありまたシカゴ学派の代表的な学者として知られている。貨幣の中立性などの主張によってノーベル経済学賞を受賞した。世界中でも有名な経済学者であるフリードマンは、1980年に初めて中国政府によって中国へ招待された。1978年に改革開放したばかりの中国では、人々は西側の制度、経済理論などについて強い学習意欲を持っていたので、フリードマンを誘った理由も彼の理論を学びたいということであった。また、同じ理由でフリードマンは復旦大学の学長の招待によって1988年に中国へ2回目の訪問を行った。しかし、中国政府との議論をみると、中国側は全くフリードマンの話を受け入れてはいなかったようだ。だが、現状の中国を見ると、やはり市場政策においてフリードマンの理論と類似しているところがある。そのため、改革開放以後の中国は、いつから、どこから市場経済にかんしてフリードマンと同様の考えに至ったのか。そしてどうして最初からフリードマンの助言通りに改革しなかったかについて、本論文では考察する。本論文では、ミルトン・フリードマンおよび彼の関係者が執筆する本を参考にしながら、フリードマンの理論を確認しながら、フリードマンの理論と中国側の実際の様子を合わせて考察する。フリードマンの1回目と2回目の訪問ルートに基づいて、80年代の中国の経済事情を参照し、フリードマンと中国の人はそれぞれの考えを確認して分析する。結果として、中国の発展は段階性があることが明らかにした。開放したばかりの中国は、経済と政治的な原因で、保守的または消極的に改革を進んでいた。そして、その段階性を理解していなかったフリードマンは、訪問中は他国の事例だけに基づいて自らのマネタリズムを主張し、中国政府も他国のようにすぐに同じこと、つまり市場に対して政府の制御を一切なくすということを強く唱えた。そのため、まだ開放の初期の段階に居た中国は、当たり前前にフリードマンの言葉を拒否した。しかし、中国の発展が進むことによって、中国の経済状況と、人々のイデオロギーもついでに上の段階に進んだため、90年代からの中国政府の市場政策も、ようやくフリードマンの理論と近寄ってきた。